

## 借地の拡大には

### 人妻を口説くテクが!?

自分の所有地55haに借地53haの108haが本年の私の経営面積だ。借地53haの内およそ40haは産地づくり(転作奨励金)を受けている。4万6000円(1反あたり・麦の場合)から土地改良区経費5800円(1反あたり)、その他経費として数千円を差し引いた金額を土地の所有者に返している。

理由は簡単だ。このようにでもないとい面積の規模拡大は望めない現実がある。黙っていたら、私には土地があたらないので、少しでも**大脳の一部**を使ったただけだ。

周りでは「地域の団結が大切だ!小さな農家を大切にしないとダメだ!」などと、どこかの政党のようなことを言うが、本音は土地の所有者に1万2000円(1反あたり)の小作料のみを支払い、残りの産地づくりのお金をいただくこうとする。そして、最後には、「オレはお前(宮井)と同じやり方はできない!」と本音が出る。

確かに、このやり方は耕作者にとっては金銭面で有利だが、土地の所有者にとっては収入が減り、農業者のプライドを捨てさせるなど、心温かいシステムとは言い難い。

では、私はどのような農家の土地を増やしたのか。実はこのやり方には独自のテクニク、条件がある。

基本的に、土地の持ち主である主人には嫌われていた方が都合良い。しかし**奥様には決して嫌われてはいけない。**

行動を開始時刻は夜6時30分。「土地を貸してくれませんか? 働いてコメを作ってナンボ残りますか?」と金額を前面に出し本音で話す。

「産地づくり交付金はすべてあなたの物です、働かないで460万(10ha分)残した方が良いとは思いませんか? 私がこのお金を支払うと言ったら信用しませんよね? 日本政府がクリスマス・プレゼントに払うのですから、間違いないですよ」  
このような場合、ご主人は「ん〜」とうなるだけで結論を出さない場合が多い。でも、台所でコンコンと包丁を使って夕食の準備をしていた奥様の「お父さん、いい話じゃない。託してみたら?」の一言で決まり。すべて決断するのは女性の方だ。

## 私はこうして借地する

Vol.5



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約8000万円。

Illustration by Kazushige Akita

なんと男の頼りないことか。

決まる時は5分で決まるが、奥様が納得しないと、何時間話し合いをしても無駄だ。

というわけで、私が6時30分ころ、あなたの自宅にお邪魔した場合は、**もしかして……。**

ハッキリ言って、男は役に立ちませんね。プライドの問題なのか、それとも女性が金銭感覚に敏

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

感なのか？ しかし奥様が理解されても、後にその話は聞いていないと言われ、農協の圧力で白紙になったことももちろんある。

現実には農業委員会がOKを出す前に、農協がハイと言わない限りは農地の賃貸、売買が円滑に進まないのは事実だ。文句の一つも言うが基本的には金融機関としての色合いが強い、現在の農協組織の反対を押し切つて進めても無駄なこともある。

「そんなことはない！ 親しい間柄であつたら、もつとスムーズにいく」  
「だって？ もしあなたが勝手に冷蔵庫を開けても文句を言われないくらい親しい関係の農家に、「オレにお前の土地を安く貸せ！」と言えますか？ 嫌われているかがどうかの問題ではなく、相手の生活を考へて土地の購入、借地をしなければ相手は信頼してくれない。

あの手この手で土地を増やしているが、土地を貸してくれる相手から「金銭的にきれいにやつて来た経緯を見ていたからだ」と言われた時は、正直うれしいと感じた。

私のように嫌われることは、都合の良い場合があり、農水には存在しない規模拡大のやり方も存在する。

このようなこともあつた。ある年に正式に賃貸を結んでいた人から土地の売買の話申し込まれた。もち

ろん反対する理由もないし、事前に農協に相談して了解を取つてあると話していたので、斡旋委員会（農業委員会の地区下部組織）を通じて、農業委員会に申し出ることにした。

そこでちょっと待った！ コールが斡旋委員会から出て、私に売買させないことになった。その結果にハシカクサイ（北海道弁でアホと言う意味）と思ひ、怒る気にもならなかつたのが正解のようだった。どういうことか。その土地を購入した人が10年後に私の所にやつて来て、諸般の事情で、私が買おうとした土地を含め所有する全部の土地を相対で貸すと申し出てきたのだ。

暗渠や高低差を修正するのに250万円（10ha分）ほどかかったが、彼の紳士的な態度に当時のつらさが吹っ飛んでしまい、快く引き受けさせていただくことになった。農業委員会の書類審査が終わり、私が正式に耕作することになって、ご本人も宮農生活にホッとされたのだらう、その5日後に他界した。

## 社会状況の変化に対応しようとするかしないか

母親の実家がある香川県では昭和45年の休耕、転作が始まった当初から補助金の全額返しがあつたようだが、北海道のこの地域では、なぜか

大々的に始める者はいなかつた。その結果、裏契約だ、地域のやり方を無視したやり方だの、村八分ではないが、村五分程度の評価をいたたく結果になる。

ただける金額は多いほど良いが、産地づくり交付金がないということは一畑と同じ条件である。北海道では十勝と同じ条件である。あとはどれだけ収穫、収益があるか、つまり自分の努力の問題であると共に、作業委託というやり方であつて、決して国の考へた農政の枠組みをはみ出したやり方ではないと考へる。

ところで、ついこの前あつた、北海道選出の町村官房長官の発言は冗談にしても、本音で言うと、日本のコメにかかわる産地づくり交付金はいつまで続くのかが一番の興味だ。本誌・昆編集長はこのように発言した。

「縁故米、旧自主流通米などの政府が関与していないコメの流通量はおよそ400万t、現在の生産量が830万tで、毎年20万t消費が落ちているので20年後には政府はコメに関与しなくても良い環境になる、当然その時が来る前に農水は現在のイギリスのように農水の存在自体が危ぶまれる」

ん。なるほど。こんなことを考へられる人がいることがすごい！

世間では「コメは日本の主食だ！」などと時代錯誤も甚だしい考へを持つ生産者がまだ多い。しかし、子供が一度ハンバーガーやピザを舌で覚えてしまつてから、味噌汁、たくわんでも一生OK！ なんて子供が出てくることは到底ありえない。

このことは日本マクドナルドの創立者である故・藤田田さん著の『ユダヤの商法』（KKベストセラーズ）に書かれてある。この本では「日本人にハンバーガーを食べてもらつて金髪ブルーアイにする！」とあり、「見かけを欧米人と同じにすれば間違いなく日本人の方が優秀だ！」ともある。東京を始め全国津々浦々、若者の多くが金髪やブルーの着色コンタクトをしている日本人を見てご自分の予言（事業）の正しさが証明されたことを、藤田さんは天国からスローフード推進者と席を並べて見ているのだろう。

自分はこの近未来に関してどうすれば良いのか？ ということを日々考へてその環境に対応しようとする生産者と、コメだけが日本の農業だけだと何十年前から発言して自分の学力優秀なご自分の子供にその後ろ姿を見せ続けている生産者とは、良くも悪くも差ができるのは当然であると思へる。そう思うのは私だけではないはずだ。